

近世京都の観光都市化論

鎌 田 道 隆

(一) 中央経済都市京都の破綻

近世都市京都は、天正十八年を中心とする豊臣秀吉の都市改造によって、その都市機能を策定され、構造的にもほぼその都市改造を原基として、近世都市として展開したといえる。秀吉によって策定された都市機能とは何かといえば、石高制成立の成否をなう米の換金市場としてのマーケット機能、すなわち経済都市としてのそれであったと考えられる。

天正十九年九月には、都市改造事業のほぼ終了した洛中に対して、秀吉は地子銭の永代免除を伝え、経済都市としての発展を促すための都市民への税制優遇措置の方針を明示している。徳川氏も、豊臣氏の都市政策を継承した。

「寛永十四年洛中絵図」によれば、豊臣政権がおこなった

町割りや寺院街形成の都市改造手法は徳川政権下でも踏襲され、二条城周辺の町割りや洛中西端の寺院街区形成にそれを見ることが出来る。「寛永十四年洛中絵図」では、すでに洛中の街区が町場として発展していることを読むことができる。

地理的な境域や町割りという視点からすれば、十七世紀から十八世紀にかけて、鴨川兩岸の築堤によって鴨川右岸の河原町や木屋町、左岸の鴨東地域に町場建設がすすみ、また内野地域の開発も進行したが、豊臣秀吉の都市改造から江戸時代初頭の京都がそのまま近世京都の原型をなしていた。巨視的にみれば、近世都市京都は、昭和三十年代の高度経済成長直前まで、近代京都の市街地境域とほとんど変わることなく重なっていた。すなわち、昭和二十年代の上京区、中京区、下京区の市街地境域が、近世京都の洛中

にほぼ相当しているのである。

京都市街地の形成という面からみると、近世都市京都が近代京都の原型として見えてくるのであるが、都市機能や都市構造という視点に立てば、十七世紀後半から十八世紀にかけて、京都は大きく転回している。一言でいえば、経済都市から観光都市への転換である。

天正十八年の京都改造は、京都を権力の手で強引に再開発して、商工業都市として定立することにあつた。この都市改造後、聚楽第を破却して、聚楽第を中心とする京都の城下町化¹政治都市化を明瞭に否定したことによって、秀吉の京都経済都市化の方針は一層明らかとなつた。²京都を経済都市として位置づけるため、文禄三年以降政治都市として新都市伏見が建設されていったのである。

秀吉の時代から江戸時代前期の京都は、米の最大消費地であり、換金市場であつた。江戸時代中期に大坂が巨大都市として発展し、日本最大の米穀換金市場に成長するまでは、大津を玄関口とする米穀市場としての位置に京都はあつた。京都には、聚楽第の造宮から破却そして伏見城下町の建設、大仏殿方広寺や二条城の造宮、禁裏公家街の改造などの巨大工事が続き、数万人から数十万人の工事関係者が

動員されており、その食糧の供給も莫大であつたと推計される。また、江戸時代前期の奈良も、晒布生産を中心とする産業都市であり、大津米市場に集められた北陸・東海・近江産米の消費地・換金市場であつた。³大津市場の米は、山中越や逢坂・日の岡峠越えで京都へ、山科・醍醐経由で伏見や奈良へ大量に輸送されていった。

朱印船貿易などの海外交易に乗り出した商人も京都商人だつた。海外渡航が禁止されたあとも、生糸などを求めて長崎商いに従事した国際交易商人も京都には少なくなかつた。⁴

享保十三年の序文をもつ『町人考見録』は、京都豪商たちの没落事例を参考にして、町人の商売のあり方や身持ち・振舞いの教訓にしようとして三井高房がまとめたものである。この書には、十七世紀の京都を中心に営業活動を行つた著名な豪商四十六家の没落例・成功例とともに、銀座・糸割符・呉服所・両替屋の営業構造の分析を記述している。『町人考見録』は、豪商たちの没落事例を教訓とした新興町人の経営理念確立の書として、町人たちの間で筆写されていったものであるが、見方を変えると、十七世紀における京都経済界の繁栄を語る貴重な史料でもある。享保十三

年から数えて八十年以前の慶安年間から享保初年までに、銀にして二、三十万貫目から五、六千貫目という巨額の蓄財をした京都豪商たちの記録なのである。

京都豪商たちの致富は領主経済に依拠した大名貸や投機的な長崎貿易というが多く、この致富方法が同時に没落要因でもあるというのが『町人考見録』の見解である。大名貸とは、各地の大名のもとに収納される年貢米を引当てとした利貸し商売であり、米の先物取引にほかならない。

銀座・糸割符・呉服所・両替屋なども、銀貨や銅貨の改鋳差益、生糸や呉服御用達商品の元値段への歩附による収益、金銀両替差額の徴収など、いずれも大量取引の差益による利殖で、京都経済界は活況を呈していたということになる。

しかし、こうした領主経済に依拠した経営は、『町人考見録』の実例が示すようにリスクが大きく、破綻へ至る場合が少なくなかった。また江戸幕府の政治政策の転換も、こうした京都経済へのダメージをあたえるものであった。

そのひとつは、鎖国政策による海外交易の統制であり、もうひとつは商業資本保護育成策の放棄であった。もちろん、鎖国後も長崎交易というかたちで京都の商人たちも多く海外との交易品の売買にたずさわっていたし、豪商たちのな

かでも大名貸や為替業務を通じて、領主経済と深く結びついて成功しているものもあった。しかし、十七世紀の後半には全国的な流通経済の中心は次第に大坂へと移り、西日本政治のなかで京都の占める政治的位置も相対的に低下していった。京都町奉行のもっていた畿内近国八カ国におよぶ管轄権が、しだいに大坂町奉行に分与され、享保年中には京都町奉行と大坂町奉行が管轄権を四カ国ずつに折半するようになる。

十七世紀の前半には日本経済の中心的位置にあり、全国的な流通の中央市場であった京都では、商業資本を蓄積する豪商が出現して京都経済になったが、大坂の台頭や経済政策の変動と経営理念の未確立とによって、豪商が没落して、京都経済は大きな構造的変化を余儀なくされた。京都では工芸や手工業を中心とする生産の都市へと、その経済構造を急速に転換させていくことになる。

(二) 名物・名産の京都ブランド化

元禄四年に京都を訪れたオランダ東インド会社派遣の江戸参府随員のドイツ人医師ケンペルは、京都が日本の代表

的な商工業都市であること、京都ブランドの商品がすでに成立していることを観察している。^①

京は、いわば日本における工芸や手工業や商業の中心地である。何かを売ったり、あるいは作ったりしていない家は、ほとんど見当らない。銅を精錬する人、貨幣を鑄造する人、書籍の印刷を業とする人、金糸や銀糸で高価な花模様の反物を織る人、非常に貴重な伝統の染色術を行なう人、精巧な彫刻をする人、楽器を作る人、黄金やその他の金属を使って非常に念入りな仕事をする人、ことに最上の鋼板を鍛え、それで大へん見事な刀やそのほかの武器を作る人々がいる。その上きれいな衣装、種々の装身具、自力で動く巧妙な人形やおもちゃの類がここで作られ、商品として陳列してある。要するに何かが考案されて、それを作ったり、あるいは精巧な外国の品物を見せてもらって、それを模造する名人が、かなりいるということである。それゆえ京都の工芸品は全国に名が通っていて、京の製品という名前さえついていけば、実際に出来栄が大へん悪くても、ほかの品よりずっと好かれるということである。大通りには商家以外はほとんどなく、こんな

たくさんの商品や小売の品物に買手が集まってくるかと、われわれは驚くほかはない。旅行者は、誰もが自分か他の人のために何かを買い込み、それをもって立去っていく。

ケンペルの京都に関する観察と分析は詳細で鋭い。当時の日本人に見えなかったことまで見抜いているといえよう。ケンペルの指摘によると、十七世紀末の京都は、(1)生活必需品から贅沢品にいたるまで、あらゆる一流品が生産される都市であること、(2)さまざまな職種にわたる第一級の技術者がいること、(3)京都産の製品であることに高い評価があたえられていること、(4)表通りの商店には大量の商品がならべられていること、(5)多くの旅行者が土産物として京都産品を買い求めること、等々が見えるという。

たしかに、江戸時代の後期の京都では、京焼、京菓子、京人形、京扇、京野菜、京紅、京白粉などの「京」という文字を冠してよばれる名産・名物から、京学、京医、京踊、京言葉などの学問や芸能などの独特の文化領域の誕生が指摘されている。ところが、ケンペルはそうした京都ブランドの成立が、十七世紀末の元禄年間（一六八八―一七〇三）には人々の意識のなかに存在していることを看破している

のである。さらに「京の製品という名前さえ付いていれば、実際に出来栄が大へん悪くても、ほかの品よりずっと好かれる」と、もう早くも京都ブランドの形骸化というか名目化の問題が一部には発生していることも、ケンペルは指摘している。

京都の「名声」はともかくとして、十七世紀の京都が、他の都市に比して、諸国に知られるような名産、名物を数多く産する都市であったことは間違いない。寛永十五年の序をもつ松江重頼編の俳論書『毛吹草』は、諸国の特産物を掲載していることで著名である。同書には農産品や手工業品など一八〇〇余の名産があげられている。このうち手工業品にしぼってみると、数え方にもよるが京都＝洛中だけで約三〇〇品にのぼる。大坂、堺、奈良、長崎などの都市が約四〇品から二〇品位の産物数であるのにくらべれば、京都は他都市を圧倒しているといえる。洛中名産品の一例をあげると、たとえば武具関係では伊勢因幡守作鞍鎧、埋忠鏢、佐伯柄巻などのように、人名を冠して呼ばれているものがある。これは誰々作の何々という表現であるが、おそらく名人名工の作品であることを示すブランドとして広く知られていたのであろう。ただし『毛吹草』にはこうし

たブランド品だけではなく、粗雑で安価な製品も地域の特産として数多くあげられている。たとえば、万里小路通の「罌（鹿相物）ナリ」、室町通の「目貫（鹿相物）ナリ」、四条坊門通の「茶釜（鹿相物）ナリ」などがある。

名人名工の作品は大量に供給されないが、「鹿相物」は供給量が豊富で一般庶民でも手軽に買い求めることができる大衆商品として、名物・特産品に値いすると考えられていたのであろう。『毛吹草』は西陣等を除いて、京中の東西路・南北路の各通りごとに京都産品を掲げているが、多くは各通りの同業者町、同業者街、そして著名な商工業者の産物を紹介しているわけである。

手工業都市、また名物商品の生産都市としての京都の特性は、寛文五年刊の『京雀』や延宝六年刊の『京雀跡追』、貞享二年刊の『京羽二重』などの地誌から、そのさらなる発展ぶりをうかがうことができる。¹²とくに『京雀跡追』は、市中の生業の記載の克明さに特色があり、「都の町を尋ますれば、ほしい物有と申。先そろりく〜とまいるふ。やれ〜、何をともめ儘く御さる」と序文でも述べているように、豊富な物産の供給を誇る都市として、京都を位置づけている。

『京羽二重』は、京都に関するはじめての総合的な案内書であるが、京都の自然景観や東西南北の町筋、旧跡・史跡・神社・寺院、官位補略、京都諸役人等々を網羅するほか、「諸師諸芸」と「諸職名匠」の項を立て、京都の文化人や著名な技術者・商人をかかっている。

たとえば、「諸師諸芸」では、医師、儒者、曆学者、神道家、算者、連歌師、俳諧師、碁、将棋、立花、茶湯、刀目利、料理、検校、能太夫、狂言師等があげられ、それぞれについて高名な人々の住所と名前を数名から数十名の範囲で書きあげている。また医師の場合のように本道医、小児医、産前産後医、目医、外科と細分類してかかげたものもある。当代一流の人がもれなく掲載されているわけではないが、京都の文化や産業の展開をよく示している。

産業都市京都の様相は、「諸職名匠」の部により端的にうかがうことができる。「諸職名匠」では金座・銀座以下、御呉服師など一六八種に分けて著名な職人や商人をかかけて、職種の豊富さにぎやかさがまず第一に感じられる。しかし、何を基準にして「諸師諸芸」と「諸職名匠」を区分したのかについては、不明なところがある。絵師が「諸師諸芸」の部にあり、大仏師が「諸職名匠」の部となってい

る例などがそれである。

つぎに、「諸職名匠」の職種と人名とを一覧すると、京都産業のいくつかの特色を発見する。まず、呉服所、翠簾所、香具所、屏風所、琴所などのように、何々所と称するものが多いことであり、また同じように大経師、御茶師、装束師、覺師、仏具師、筆師、蒔絵師、櫛師など、何々師とよばれる職種も多いことである。所は商店を示し、師は職人を示すかのようにも考えられるが、かならずしもそれはあたらぬ。どちらかといえば、両者ともに公儀や朝廷などの御用を勤めることを示唆しているものと考えられる。

こうした視点に立つと、何々所や何々師以外の職種・職掌で、三味線屋、製菓屋、粽屋などの何々屋とよばれている場合にも、掲載されている人名に、かなりの割合いで受領名を名乗るものがあるのである。これこそまさに京都朝廷とのつながりを示すもので、朝廷を中心とする伝統や權威と結びついた京都の産業構造が見える。庶民の側からいえば、京都の伝統や歴史のシンボルである天皇を商売のレベルまで引きおろして活用することで、商売上の名声として支えることになる。技術者や商人たちも、京都の伝統文化を支えるかたちをとることで、京都ブランドの形成に参加

していたとも見ることが出来る。

(三) 京風文化の成立

江戸時代の呼称が示すように、十七世紀から十八世紀にかけて、政治や経済だけでなく、文化の面でも江戸にその中心のひとつが開花しつつあった。そうしたなかで、江戸風とは異なる京都風の文化が創成されていったことは注目しに値する。政治や経済は、江戸の風に流されなければならなかったが、学問も芸術も芸能も、京都の歴史と伝統と都市の営みに育まれて、江戸時代中期にもっとも京都らしい文化が形成された。

近世の学問は儒学に代表され、とくに朱子学は幕府の官学として展開し、江戸を中心に根づいたが、その朱子学の祖となったのは、京の人林羅山であった。しかも、その本家ともいえるべき藤原惺窩の学統は、むしろ京都にのこって京学とよばれる独特の学風を発達させた。羅山の師であった藤原惺窩の学問的系譜は、松永尺五、木下順庵へと引きつがれた。

松永尺五は、貞門俳諧の祖松永貞徳の子で、寛永年中に

春秋館や講習堂の学塾を開いて、五〇〇人にもおよぶ門人を全国から集めたといわれる。堀川二条における講習堂の開設には、所司代板倉重宗の援助があり、「講習堂」の扁額は後水尾上皇の宸筆である。また慶安元年建立の尺五堂は、石川丈山の命名になる。尺五は、反江戸の雰囲気をもつ京都上層町衆たちになった寛永文化の中心的人物のひとつりだったといえる。

松永尺五門下の木下順庵は、加賀藩の藩儒に任じられながら、江戸と加賀との往復のかたわら、京都に住居を構え、門弟たちの教育にあたった。順庵の学風は、寛容であたたかみがあり、篤実な人柄が教育者として崇敬を集めたといえる。新井白石、室鳩巢をはじめ、雨森芳洲、祇園南海、榊原篁洲、南部南山、杉浦霞沼、三宅観瀾らのきわめて個性的な学者が順庵門下から輩出した。江戸の朱子学とはかなり異なった学風の京学は、京都の風土が育てたものといえてよい。

厳密な学統・学派の意味では京学とはよばないが、山崎闇斎や伊藤仁斎らの独自の学説と学風も、京都という都市のもつ寛容な学問的環境と伝統の深み、そして非政治都市という自由な雰囲気のなかに花開いたものであろう。闇斎

の学問は、朱子学と神道とを結びつけた特異なもので、その門下は崎門学派とよばれる。古学また古義学を提唱した伊藤仁齋も、古義堂を中心に多くの門下を集めて、堀川学派を形成した。

陽明学も国学も、そして本草学や医学も京都では、学問研究への政治的干渉からのがれて、それぞれ個性的な展開を示した。とくに、江戸の儒学が朱子学で固められつつある時代に、朱子学への批判も許されるといふ風土を京都が形成していたことは注目しておきたい。たとえば、李朱医学に対して疑問を提出し、漢方医学の臨床実験への復古を説いた古医方の名古屋玄医や、空論を排した実験主義から死体の腑分けへと進んだ山脇東洋や、親試実験の実験医学への道を開いた吉益東洞など、医学の方面でも京都では先端の学者を輩出している。¹⁴⁾

学者や文化人の業績だけではなく、庶民の世界でも、学文というか習い事というようなかたちで、京都らしい文化が形成されていった。その代表的な動きは、町人哲学ともよばれる石田梅岩の心学である。京都の商家で丁稚奉公から壮年になるまで勤めてきた梅岩が町人の生き方を学問的に体系づけて、車屋町に講席を設けて、町の人々に無料聴

講をよびかけたのが、享保十四年のことであった。この梅岩の教えは、京都町人のなかから後継者を生み、石門心学の名で市中の各所に、五楽舎、修正舎、時習舎、明倫舎等々の多くの講舎を開設して、庶民の学習の場をつくり出していった。¹⁵⁾

さらに庶民的な習い事という意味では、市中町々の会所で、また町家のなかで、さまざまな詩文、俳諧、能、鼓など京風の諸芸が流行したことが知られている。とくに「便用謡」などは、謡の素養のある人々が、町内の人を対象として指導にあたり、子弟の教養として伝承された代表的な会所の習い事であり、¹⁶⁾庶民の学習の態様のひとつとして注目される。

江戸時代中期以降に、家元制度というかたちで庶民の間に広く浸透した立花や茶の湯も、京都文化とよべるかたちで展開している。江戸時代に入って京都の都市化が急速に進んだことよって、都市民が遠のいていく自然を生活のなかに取り入れていくようになる動きとも関連するのであるが、床の間に手がかるに生けられる「いけば花」として、また繁雑な立花様式から開放された、簡略な基本花型の考案を経て、生け花は庶民の間で流行していった。

立花の家元池坊が主催する七夕立花会は、江戸時代の初めから京都の年中行事として人々に親しまれていたが、それは六角堂を会場としたものであった。六角堂といえは室町時代から下京衆の寄り合いの場であり、町衆たちの自治と連帯の精神的拠り処でもあった。その六角堂における七夕立花会には、京都市中はもとより、全国から池坊の門弟が参集したという。六角堂の生花は、もっとも京都らしい場で、京風の芸術というかたちで、京都文化を広くアピールしていたといえる。

茶の湯も、武士や公家の世界との密接な関係のほかに、家元制度というシステムをとることで、庶民の芸事や教養文化として広く庶民に受け入れられていった。千家や藪内家などの家元が定式化した教授法を、町師匠を通じて一般門弟に段階毎に指導し、一定の到達度に応じて、家元から直接に免許状があたえられるのが家元制度である。茶の湯が庶民の教養文化として普及・定着していった背景には、こうしたみごとに教育組織の編成があった。

茶・花・香などの習い事が、庶民の教養として広く普及していったにもかかわらず、それらが低俗化しなかったということも、京都文化の一特質として注目される。それは、

家元における総合的芸術性の保持というシステムによって保障されていたのではないかと考える。

花道の池坊においては、鉢は家元の歴代が自分好みを図示して安重に注文し、花器は植松、花材は花市、図譜は村上平楽寺というように、選びぬかれた技術者や業者との信頼関係のなかで、生花の道具や環境をととのえていたという。

茶道の「千家十職」も、同じように江戸時代において家元と特定の部門の芸術とが手を結んでいった結果形成されたものであった。現在の「千家十職」は、茶焼の茶家、釜師の大西家、一閑張細工師の飛來家、塗師の中村家、表具師の奥村家、竹細工の黒田家、袋師の土田家、陶器師の永楽家、金物師の中川家、指物師の駒沢家とされるが、いずれも当代一流の伝統と技術を誇る家々である。茶道文化の奥深さというか芸術性の高さは、これらの特出した技法の総合化にあり、この技艺の総合化こそ京都文化の本質にかかわったものであると考えられる。

(四) 生活のなかの京風文化

京都は盆地という地理的環境に都市形成がすすめられたためか、冬は寒く夏は暑い。ことに夏の蒸し暑さは特筆ものである。しかしこの蒸し暑ささえ、京の人々はまことに上手につきあい、独自の都市文化としてとりこんでいる。

日本を代表する夏祭りである祇園祭は、もともと祇園御霊会とよばれ、古代の都市化に伴う疫病流行に対して、その病気退散祈願の神事であったが、近世の祇園会には蒸し暑くてつらい夏の都市生活を乗り切る夏祭りとして、都市町人の文化創造の面が強く付加されている。一カ月以上にわたる祇園祭の準備と練習は、伝統の継承というかたちをとる暑気払いである。山鉦町はもとより寄町を含めての経済的負担は、自分たちの祇園祭という意識を高め、文化的財産である山や鉦の共有意識を育む方向へとつながっている。

そして、京都の都市化が進行するにつれての自然からの離脱を補うかのように、草花をかざるかわりに当代一流の絵師や鋳師や細工師を動員して、芸術にまで高められた自然の草花や植物の姿を山や鉦に取り入れている。また、分を

こえた奢侈や過差な家産の所持が厳しく罰せられる江戸時代の社会で、しかもキリシタン禁制によって洋書などでさえなかなか許されない風潮のなかで、ヨーロッパのタペストリーなどの和洋の逸品をかざりつけ、動く美術館と評される祇園祭の演出は、京都町人の文化意識の高さをもがたっている。祇園祭が町人の分をこえた華奢として幕府からのとがめと処罰をうけなかったのは、おそらくこれが町人の個人的資産ではなく、町民共有というかたちをとった庶民の知恵によるものであったと思う。

祇園祭だけではなく、京都の人々は蒸し暑さをしのぐ手だてを、町家づくりや暮らしの工夫として実践している。京都の町家の多くは、通りに面して一階はいわゆるべんがら格子、二階は低く虫籠窓を付した景観である。表通りから格子を明けて屋内に入ると、通り庭が奥まで通じ、店の間や中の間、客間、仏間などがならぶ。さらに奥には、坪庭そして土蔵・離れなどがしつらえられている。このかたちは住宅が密集する都市住宅の基本で、間口が狭く奥行きがながい。いわゆるうなぎの寝床型である。これも狭い都市域になるべく多くの商工業者が軒をならべるための知恵であるが、とくに坪庭(中庭)の設定はすこしでも自然を

都市生活の中にとり入れようとする気持のあらわれである。夏になると、涼しさを演出するために、店の間から奥向きの住室までの障子や襖を葎簀障子に入れ替える。そして表の通りに打ち水をする、べんがら格子から坪庭までの住宅空間に風が流れる。これこそは、京都らしい町家づくりの知恵であり、江戸時代中期以降の大江や左官や庭師や細工指物師等々の技術のみごとな連携であり、総合的技術の成果といつてよい。

こうした規格化されたような都市住宅が、独特の町並景観を形成するようになるのは、江戸時代の中・後期からである。江戸時代初頭前後の京都の都市景観は、いくつもの洛中洛外図屏風から知ることができる。戦国期の様相を示す町田家本洛中洛外図では、板葺屋根の上に石の重しが乗っている住宅が多く、通りに面した開口部の間口も大きく、太く粗い格子とのれんが描かれている。江戸時代に入ると二階建の町家が連続するようになり、屋根は柿葺や瓦葺もみられるようになるが、壁の色をはじめ外観の意匠も多彩で、統一された町並み景観は、まだ完成されてはいない。十七世紀の中ころから京都の町々の町規則のなかに、町並み景観に言及した町家づくりの条文が見えるようになる。

たとえば、清和院町の万治・寛文年間の町規則では、通りに面してデコボコのないように家屋の位置を隣家に合わせ、てそろえること、表通りには葎を建築しないこと、表屏もつくらないことなどを規定している。また直接的に建物や外観を規制しているわけではないが、町毎に居住者の職業や身分に言及した条文も多い。武士や検校や出家の居住を排除した町、同業者や先住者の職業を保護した規定をもつ町、騒音や悪臭などを発する職種の来住を排除した町など、それぞれの町の営みはじつにさまざまである。¹⁹住みよい町、安心して暮らせる町、誇りをもてる町への町づくり意識の強さを、これらの町規則のなかにみることができよう。そうした「町」意識が、町並み景観の共有へとすすみ、個々の町家の個性よりも、町並みや通りの美しさや品位の重視へと展開している。

京都は、宝永五年、享保十五年、天明八年、元治元年と大規模な火災を相ついで体験し、何回も町並みを焼失してきた。これらの大火の復興の過程では、町並み景観がなお一層整備され、都会的な街路景観もつくり出されてきた。個々の町の景観から、東西南北の街路景観、そして地域毎の都市景観の統一へという意識の発達は注目しておきたい。

(五) 観光開発への動き

貴族や上流階層の人々が、氏神詣や本山まいり、また古歌の地や歴史の旧跡を訪ねることは、すでに平安時代から鎌倉・室町時代にみられ、小旅行となることもしばしばであった。平安京の貴族たちが、南都の春日社や興福寺へお詣りに出かけたり、各地の有力者たちが伊勢参宮や熊野詣へと旅立ったことはよく知られている。

しかし、江戸時代の中期になると、庶民生活の向上によって、一般庶民が信仰と遊山の旅に出かけるようになった。それには、街道や宿場の整備、茶店や接待所や道標などの街道施設の充実などがみられたこともあったが、そうした旅人を吸引する条件と努力がいわゆる観光地において開発され、つみ重ねられていったことが最大の要因であった。

京都は古代平安京以来の都であり、政治の場、戦争の場、政争の場であるとともに、王城の地、文化の地として、多くの歴史的旧跡や名所を蓄積してきた。江戸時代に入ると、日本人全員を仏教徒としてしまう檀家制度によって、京都の寺々の多くは、全国各地の檀那寺の本山・本寺としての

位置を占めることになった。地方末寺の檀家たちが、ありがたい宗祖やその遺跡を訪ねる、信仰の旅本山詣の目的地に京都はなっていた。

この信仰の旅の背景にあったのは、各寺々による開基・開山などの祥忌の供養である遠忌や開帳などの社寺行事の復興・行修であった。²⁰たとえば、東寺では寛永十一年の弘法大師八百回遠忌以来、江戸時代を通じて五十年毎に遠忌は正確に履修されるようになった。また、日蓮上人、法然上人、菅原道真、聖徳太子、空也上人など著名な人々の遠忌供養に関係する寺院や神社で行なわれ、公開されるようになるのも十七世紀から十八世紀のことである。洛中の南端に偉容を誇る本願寺では、遠忌のほかに、法主の手で形式的な剃髪の儀式と法名の授与を行なう「御剃刀頂戴」、法主の前での食事の相伴である「御前の御相伴」などを考案して、本山詣の門徒を喜ばせる宗教行事を開発している。

京都の寺々は、それぞれの靈験にちなんで本尊秘仏や什宝の開帳や縁日の修法で人々の参詣をあつめ、これが年中行事として定着した。正月の初寅の日は鞍馬の毘沙門天詣、十五日は嵯峨清涼寺の本尊釈迦立像の開帳、十六日は千本閻魔堂と北山鹿苑寺の石不動詣などといった具合である。²¹

また、西国三十三所観音巡拝の聖地巡礼になぞらえて、洛陽三十三所観音詣を設けたり、六地藏めぐりや名釈迦・名薬師・名弥陀・名不動詣など、新たな庶民信仰の京都めぐりが考案された。²²⁾これらは京都の寺々がいくつか手をつなぎあうことによって、新たな観光資源を開発していったことを示している。

社寺の境内や門前には、参詣に必要な仏具・神具や土産物を売る店、休憩や娯楽のための茶屋や料理屋などが軒をつらねた。北野神社の天神さんや東寺の弘法さんなどの定期市が開かれ、参詣者だけではなく都市生活の日用品から骨董品まで供給するようになるのも江戸時代のことである。

政治や経済が安定した江戸時代には、廃絶していた旧儀の復興もあいつぎ、京都の伝統と文化が一層豊かなものとなった。延宝七年には二百年以上途絶えていた石清水放生会が復興され、貞享四年には後土御門天皇以来二百四十年廃絶していた大嘗会が復活した。元禄七年には応仁元年以来の賀茂社の葵祭が再興された。また宝永の大火による焼失地域の復興のなかで、禁裏御所や公家町もめざましい整備をとげ、天明大火の復興のなかでは、平安京内裏の旧制に復することを意図して、寛政度の内裏造営が行なわれた

ことも注目される。²³⁾

京都市中には、鴨川の堤防が寛文十年に築造されてから、河原町・木屋町の開発が急速に進んで、市民による夏期の鴨川納涼が盛大におこなわれるようになった。鴨川の東でも芝居街や祇園新地の遊興地が開かれ、遊客の足を誘った。三条大橋の界限には、旅行者のための宿屋街が発展した。いくつかの宿屋では、旅行者を宿泊させるだけではなく、観光案内人を置いて、京都の地理や遊覧に不案内な旅人のもとめに応じ、効率的な京都の観光案内にあたらせている。江戸時代後期の浪花講の史料によると、浪花講指定旅館のかめや吉兵衛と井筒屋徳兵衛、扇屋庄七の三軒では、東山案内賃二百五十文、西山案内賃三百文と、コース別の案内賃を決めていた。

旅人の来集を意識した工夫は、京都の出版界でも進展していた。これまでの宗教書や漢籍などの出版に加えて、京都観光の手引書や案内図などに、さまざまな工夫と開発のエネルギーが投入されていた。印刷刊行された京都図のうち、「寛永平安町古図」や「平安城東西南北町並之図」など江戸時代初期のものは、京都市中の街区の町名や主な社寺、内裏・二条城のほかは、近郊の名所を図化する程度

であった。しかし「承応二年刊 新改洛陽並洛外之図」や「寛文二年刊 新板平安城東西南北町並洛外之図」など以降のものになると、京都四周の山々や川筋・街道などで京都の全体像が把握できるように示すとともに、洛中洛外の景観や町村名、観光名所に関する情報などを次第に多く掲載するようになっていく。²⁵さらに観光対象となる建造物や名所は鳥瞰図風に立体的な景観として描きだし、見る者の興味を引きたてる工夫がなされている。桜や紅葉の名所や松林などの描き分け、また折りたたんで携行できる絵図寸法などの配慮も考案されている。

京都案内書の方は、さらにさまざまなかたちと内容に工夫がされている。貞享二年刊の『京羽二重』は、京都の地理や歴史、現況、政治・経済・文化まであらゆる項目にわたる京都の総合案内書であるが、目的別に京都案内のスタイルをかえた出版物が十八世紀以降にはあいついでいる。

元禄七年刊の『京独案内手引集』は『京雀跡追』や『京羽二重』の諸職商人の増補版のようなものであるが、いろは順に諸商売をならべて、その所在地を記すという新工夫を行なっている。宝永五年刊の『京内まるり』は、洛中洛外の神社仏閣を三日間の行程に分けて案内するもので、一

日目は内裏から東山辺を中心に鳥辺山まで、二日目は誓願寺から洛中南部や洛外西南部をまわって稲荷社まで、三日目は下賀茂から北辺をまわって金閣寺から二条城までというように、要領のよい道案内と旅行書の進む方向にしたがつて、右・左の方位指示など、観光遊覧のコース化に道をひらいている。さらに『都名所図会』のような正確な絵図と説明文を網羅した大部・大型の机上型の観光案内書なども出版されている。『都名所図会』のような机上でじっくり京都案内を楽しむという新たな観光出版物の登場の一方、実際に案内書を懐に入れて要所要所で懐から取り出して見ながら観光の旅がつづけられるいわゆる小形の袖珍本も考案されている。袖珍本は、道中記や町鑑類のものに多い。

江戸時代中期以降、京都はその内なる努力によって、観光都市としての性格を急速につよめ、目に見えるかたちで観光開発を進めていった。京都を訪れる人々に、京都の個性や京都らしさ、そして京都の文化を強く印象づけることができたのは、そうした京都文化の形成に多くの情熱をそそいだ江戸時代の人々の努力があったからである。

京都以外の人々がそうした京都に触れることで、京都文化は一層明瞭に認識されたことであろう。京言葉、京学、

京菓子、京扇、京人形、京料理、京染、京紅、京白粉、京
雛、京格子、京野菜、京踊等々、京の文字を冠してよばれ
る京都の情緒や学芸や産物は、京外の人々によって評価が
こめられた京都文化の表現である。しかも、それらのひと
つ一つが無関係に孤立しているのではなく、相互に連結し
京都という土俵でみがきあい協調しているという特徴を保
持している。近世中期に形成された京都文化は、京都の観
光都市化にとって、最大の観光資源であった。

補注

- (1) 鎌田道隆「京都改造―ひとつの豊臣政権論」(奈良大学史学会「奈良史学」第十一号、一九九三年)
- (2) 宮内庁書陵部蔵「寛永十四年洛中絵図」は実測によって京都大工頭中井家が作成した正確なものである。なお同図を原本として寛永後から万治までの変貌を書き加えたものに、京都大学蔵「寛永後万治前京都全図」がある。ともに近世初頭の京都を知る基本図である。
- (3) 聚楽城の建設と天正十八年の京都改造を結びつけて、京都の城下町化政策であったとする見解(西川幸治・森谷尠久「近世京都の確立」『京都市編』『京都の歴史』第五卷十七頁、一九七二年)もあるが、秀吉の京都改造事業のねらいは城下町に政治都市化ではなく、経済都市化であった。
- (4) 大宮守友「近世前期の奈良奉行」(同氏編著『奈良奉行所記録』四九三頁〜五〇三頁、一九九五年)。なお大宮氏は吉野郡における材木支配との関連でも大津の蔵米を注目している。
- (5) 原田伴彦「京都と鎖国」(京都市編『京都の歴史』第五卷、一九七二年)
- (6) 豊臣および徳川政権は、都市の保護育成とともに、流通界に影響力をもつ豪商を代官にとりたてて、年貢米の収納と販売にあたらせていたが、十七世紀後半になると都市の発達による年貢米換金市場の成長をうけて、次に豪商代官の整理処分をすすめている。
- (7) 長崎問屋は、『京羽二重織留』では、二条新町に集住。
- (8) 『町人考見録』でも、堅実な大名貸によって確実な致富をとげた例として鴻池家をあげている。
- (9) 大坂が米市場として発展してくると、京都商人のなかで諸大名の蔵本・掛屋として大坂へ進出したものが、『国花万葉記』に掲げられている。
- (10) 鎌田道隆「京郊の民政」(京都市編『京都の歴史』第六卷、一九七三年)
- (11) 斎藤信訳「江戸参府旅行日記」(東洋文庫、一九七七年)
- (12) 『新修京都叢書』(臨川書店)におさめられている。
- (13) 衣笠安喜「学問と思想」(京都市編『京都の歴史』第五卷、一九七二年)
- (14) 鎌田道隆「心学と実学」(京都市編『京都の歴史』第六卷、

一九七三年)

(15) 同前

(16) 林屋辰三郎「序説」(京都市編『京都の歴史』第六巻、一九七三年)

(17) 守屋毅・赤井達郎「町人の生活文化」(京都市編『京都の歴史』第六巻、一九七三年)

(18) 京都御苑の西側に位置する清和院町の万治二年五月の「町中定之事」には、「一、家作事仕候ハ、地形つき申節町中相談仕、上下むかふを見合、町並能様に仕へく候事」や「一、表威堅法度之事」の条文があり、また寛文十三年六月十六日定の町規にも「昔よりの町なみちかへ候事仕間敷候」の文言も見える。清和院町では、十七世紀後半から町並み景観への配慮を重視した町づくりをすすめていたことが知られる。町並みの美観意識は、おそらく、わが町の團結と誇りを育てる共同体意識の発達へつながるものである。

(19) 京都市編『京都の歴史』第六巻七七頁には、「町規による職種の制限」の一覧表が掲げられており、京都の代表的な町規則に見える家屋敷の売買および借屋に関わる禁止職種がとりあげられている。

(20) 林屋辰三郎・守屋毅「伝統文化の組成」(京都市編『京都の歴史』第六巻、一九七三年)。以下、林屋氏叙述分の成果に依拠したところが大きい。

(21) 黒川道祐撰『日次紀事』は、こうした洛中洛外の年中行事

を、文字どおり日次を追ってまとめたものであり、延宝四年以降刊行されたが、野間光辰氏の解題によれば「出版後間もなく、公辺の忌諱に触れて絶版を命ぜられ、以後専ら写本にて伝へられたといふ」とあり(新修京都叢書第四巻、都市規模での年中行事への関心はかなり高かったものと考えられる)。

(22) 藤井学「名所と本山」(京都市編『京都の歴史』第六巻、一九七三年)では、「習俗化した庶民信仰」の節をもうけて、「こうして諸仏の靈験は常に寺院の側からもくり返して宣伝され、近世社会では、いろいろの霊場や靈仏が各地に成立し、その巡拝という信仰習俗ができあがった」(同書、三二七頁)と分析している。

(23) 天明大火後の禁裏御所復興造営にあたっては、京都朝廷の側から「旧儀復古」の要求が強く出され、幕府の老中首席松平定信自身が上京して政治的解決がはかられた。定信は昌平饗の紫野栗山に大内裏の古制について調査させるとともに、裏松光世の『大内裏図考証』の成果をとり入れて造営をすすめ、襖絵などもとくに大和絵の絵様が重視された(『寛政御造営記』)。

(24) 天保十二年「浪華組道中記」十二丁(『道中記集成』第三九巻、一九九七年)

(25) 『京都市史地図編』(一九七四年)